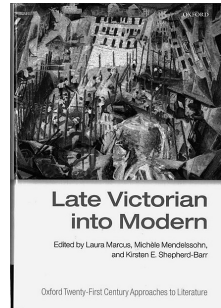


書 評

Laura Marcus, Michèle Mendelssohn, and
Kirsten E. Shepherd-Barr, eds.,
Late Victorian to Modern
(Oxford: Oxford University Press, 2016)

秦 邦生



この論集は、Oxford Twenty-first Century Approaches to Literature と題されたシリーズの四冊目として2016年に刊行された。シリーズの既刊はそれぞれ *Middle English* (2007)、*Cultural Reformations* (2010)、*Early Modern Theatricality* (2013) と題され、おもに中世から初期近代を研究対象として21世紀に入ってから英文学の新たな方向性を模索し、提示する目標を謳っていた。それに対して、本書のタイトル“Late Victorian to Modern”が意味する時代範囲とは、序論によれば1880年から1920年の40年にあたるという。“When was the modernist moment set in motion? And when does the Victorian era end?”——この時代区分を聞いて誰もが思い浮かべるであろうこうした疑問を、序論の筆者たちも冒頭で掲げている(1)。ただし、この本の目指すところは、二つの時代のあいだに明確な「断絶」を見出すことではなく、むしろ「移行期」としての世紀転換期をまたいだ多種多様な連続性の事例を掘り起こし、「新しさ」と「古さ」、「始まり」と「終わり」の感覚が逆説的に共存する当時の文化的・社会的状況を多角的に浮き彫りにすることにある。

当然ながら、19世紀末を「移行期」ととらえる見方自体はそこまで独創的なものではない。序論においては、19世紀末と20世紀初頭を横断する近年の先行研究として、欧米にとどまらずアジア、中東、インド、アフリカまで視野に含めた Michael Saler の壮大な編著 *The Fin-de-siècle World* (2014)、単著では Vincent Sherry の *Modernism and the Reinvention of Decadence* (2014) や Kristin Mahoney の *Literature and the Politics of Post-Victorian Decadence* (2015) などの名が挙げられている。この論集自体はおもにイギリス文学・

文化に焦点を絞り、事例研究のレベルでさまざまな国際的ネットワークを掘り起こしているが、時代横断的な文学史の見直しが昨今の研究の大きな潮流に棹さすものであることは間違いない。

ただし、序論を除いて全39章、600ページを越える本書は、既存の研究成果の総合よりもむしろ、比較的若い書き手たちの論考も含めて進行中の研究の見本市のような様相を呈している。それとも対応して、これらの諸論考がそれぞれに示す時代への諸観点が、全体として単一の像やナラティブに収束することはない。それぞれが注目する文化・社会・政治的事例は、しばしばほかの同時代の現象との複雑な対話関係に巻き込まれている。全体としては「モダニズムの台頭」をつねに頭の片隅には置きながらも、“the problematic homogenizing of the years 1880-1920 within the modernist paradigm” (9) を攪乱するような多種多様な文学様式・文化運動を生み出したこの時代の力強い生命力（従来の「世紀末」観からすると逆説的かもしれないが）を再現することが、本書の魅力となっている。

たとえば言えば、本書を読む経験は、いくつものパラレル・セッションが並立して何日間も続く巨大な国際学会にまぎれこんだようなものだろう。すべての議論を総括する単一的な視座を獲得することは早々にあきらめたほうがよい。まずはプログラム（つまり目次）を流し読みして、いつ、どこで、どんな議論が交わされているのかを見取り図的に把握しておこう。そのうえであとは、自分の関心に従って、さまざまな章をつまみ食いの咀嚼しながら関連づけ、今後の自分自身の滋養にしてゆければ、それがいちばん生産的な読み方なのではないだろうか。

では序論のまとめも適宜参考しながら、全体の構成と概略を確認しておこう（各章の著者名はマルカッコ内に記す）。第一部“Twilights”では、従来はこの時代の過去志向を表すものとして理解されてきた中世主義（Marcus Waithe）、神話学（Jarad Zimblar）、死の衝動（Stefano Evangelista）、ケルト主義（Daniel G. Williams）などが再検討される。Waitheはウィリアム・モリス、C. R. アシュビー、デイヴィッド・ジョーンズの著作や、芸術・建築などを分析することで、中世主義が“less as a sentimental reversion than as a distinctive outgrowth of modernity, and ultimately a constituent of modernism”と見なせることを力強く論証する（22）。またWilliamsはこの

時代のケルト主義がイングランド支配下の“an internal form of Orientalism”として理解されてきた経緯を踏まえつつ、それがむしろ当時では“a radical reconceptualization of national identities within the British Isles”を提起し、政治や芸術に大きな刺激を与えた事実を掘り起こしている(81-82)。

第二部“Making It New”は時代区分の問題に焦点をあわせつつ、前衛運動(Christos Hadjiyiannis)、詩(Hannah Sullivan)、モダニズム(Michael H. Whitworth)、演劇(Sos Eltis and Kirsten S. Shepherd-Barr)、「新しい女」(Angelique Richardson)、ユートピア思想(Anne Fernihough)など、当時のさまざまな新しい文学・思想動向が論じられる。EltisとShepherd-Barrの「新しい演劇」についての章は、バーナード・ショー、エリザベス・ロビンズ、スーザン・グラスペルなどを論じつつ、(従来のモダニズム理解に逆らって)当時の演劇においてはいかにして“bold stylistic experimentation . . . coexisted with active social engagement”であったのかを明らかにする(134)。また、Fernihoughは、世紀末以降の個人志向的な“ideal socialism”と制度改革に傾注する“practical socialism”との差異に注意を促しつつ(168)、前者の系譜にオスカー・ワイルド、エドワード・カーペンター、D. H. ロレンスから菜食主義などの食事改良に至るさまざまな文化現象を魅力的に位置づけている。

第三部“Modes and Genres”は世紀転換期におけるさまざまな新しい文体や文学形式の混在状態の再検討からはじまり(Adam Parkes)、短編小説(Adrian Hunter)、サイエンス・フィクション(Matthew Taunton)、探偵小説・スパイ小説(David Glover)など、ジャンル小説の問題が論じられる。ヘンリー・ジェイムズからジーン・リース、ジェイムズ・ジョイスに至る小説家の作品を分析するParkesの議論は、自然主義と印象主義のあいだの線引きが従来考えられていた以上に困難であることを具体的に論じ、いっけん逆説的な“modernism’s continued intimacy with realism”(202)を説得的に論証している。GloverはRobert Louis Stevensonが代表する帝國的冒険ロマンスが、この時代において一方では国内社会を舞台とする探偵小説、他方では国家防衛をテーマとするスパイ小説へと分岐する歴史的経緯を、現代まで存続するサブジャンルを意味するFranco Morettiの用語(“super-niches”)を借りつつ興味深く掘り下げている。

序文によれば、この時代は“a cultural moment in which new knowledges were forming with particular speed and intensity”でもあった(1)。このような認識を、そのような「知」が胚胎する「場所／空間」の複数性とからめて深化させるのが第四部“Sites and Spaces of Knowledge”である。具体的には、科学研究の革新と普及(Rachel Crossland)、心霊主義(Tatiana Kontou)、都市(Laurence Scott)、リージョナリズム(Penny Fielding)、帝国(Elleke Boehmer)の問題が各章で論じられる。Crosslandはエックス線、放射能、相対性理論などといった新発見に対して、コンラッドからウルフに至るモダニズムの作家たちがどう応答したかのみならず、the *Cornhill Magazine* や the *New Quarterly* などの定期刊行物が科学的知識の普及に果たした役割なども検討し、科学と文学が交錯する“the multiple strands of [the] interdisciplinary matrix”(260)のありようを探っている。Fieldingは19世紀末から20世紀初頭にかけて、田舎と都会、国と国との境界線がさまざまな運動(交通網の発展、国境横断的な移民や商業、さらには戦争など)によって攪乱されるにつれて、ハーディやエドワード・トマスなどの小説や詩作品が「人」と「土地」とのきわめて親密な関係をどのように再想像したのかを印象的に叙述している。

第五部“Minds and Bodies”は当時爆発的に増殖・発展したさまざまな科学言説のなかでも、とくに心理学と生理学の分野に焦点をあわせて、人種言説(William Greenslade)、記憶と忘却(Vincent J. Cheng)、異教主義(Dennis Denisoff)、演劇と心理学研究(Tiffany Watt Smith)、共感と戦争(Santanu Das)、子供崇拜(Marah Gubar)、ジェンダーの越境(Jana Funke)など多種多様な話題を扱っており、英文学研究ではしばらく続いているこのテーマの活況をあらためて示している。なかでは、記憶し続けることの価値を強調する近年の動向に逆らって、あえて“the desirability or usefulness of forgetting”(336)に関する思想をニーチェ、マルクス、ルナンに読み込み、ジョイスの『ユリシーズ』にその具体的表象を探るChengの論考が作家論・作品論として異彩を放っている。また、Smithの章は当時の科学研究における「模倣(mimicry)」への関心が、研究・実験の場を劇場に求めるようになった一方で、当時の演劇もまた人間心理に関する科学的知見を積極的に吸収していた経緯を具体的に論証し、近年における

“mirror neurons” (365)の発見がもたらした非意志的模倣への関心の前史を、科学と文化が雑種的に混淆する当時の文化状況のなかに探っている。

第六部“Political and Social Selves”は一転して、当時の政治・社会・経済言説と文学・文化の関連性という見地から、ラディカルな政治運動 (Ruth Livesey)、経済思想 (Benjamin Kohlmann)、労働の表象 (Sos Eltis)などを論じる。この時代におけるさまざまな社会主義運動の創設を、のちの福祉国家創設への系譜として位置づける Liveseyが強調するのは、「個」や「内面」の変革に向けられたユートピア的な希望を通じた、当時の社会運動と文学・芸術との蜜月的関係であり、この認識からこの時代が“a forcing ground for the exploration of possible alternative futures for sexual relations, for social equality, and for the individual’s rejection of capitalist modernity”であったことが刺激的に論じられる (432)。また Kohlmannの章は、19世紀末の経済思想の革新を限界効用学説の台頭に求める従来の研究に対して、福祉と共通善を重視する対抗的な伝統——ヘンリー・シジウィック、アルフレッド・マーシャルを経由してケインズへと至る——の重要性を指摘して、ラディカルな革命的ヴィジョンのみならず、“reform”への関心がウェルズからフォースターに至る小説家たちに共有されるさまをあぶり出し、説得的な議論を展開している。

第七部“Authorship, Aesthetics, and Print Cultures”は、作家、ジャンル、出版文化などを共通の関心に、唯美主義のコスモポリタン性 (Michèle Mendelssohn)、パロディ (James Williams)、自伝 (Max Saunders)、ジャーナリズム (Faith Binckes)、挿絵入りの書物 (Kamilla Elliott)の話題が扱われる。Williamsの議論は世紀末のマックス・ビアボウムやホームズ小説のパロディから、T. S. エリオットの Mr. Prufrockと *The Diary of a Nobody* (1892)との精神的親和性へと展開して、“how far the parodic vein goes in Anglophone modernism, how narrow a gap might separate a *Punch* from a *Blast*”と、挑発的な問いを投げかける (507)。Elliottの章は、見過ごされがちな本の「挿絵」という問題に言語芸術と視覚芸術との緊張をはらんだ協働関係を見出している。分厚い本書を読み込むのにそろそろ疲れてきたら、ここで紹介されている豊富な図版を眺めているだけでも楽しいので、お勧めできる。

最後の第八部の話題はそのものずばり“Technologies”である。ただしその内容は、映画 (Laura Marcus)、写真 (Kate Flint)、電話 (Sam Halliday) といった当然扱われるべき話題のほかに、植民地インドの「古物 (Bric-à-brac)」(Alexander Bubb)、や操り人形 (Olga Taxidou) など、ユニークでいっけん奇妙な選択も含まれている。MarcusやFlintといった大御所の論考はさておき、Hallidayの章はいっけん新しい電話などの新興技術が自律的なものではなく、複雑にからみあう“media ecology” (598) の一部として描かれるさまを、ドライザー、トウェイン、ウィンダム・ルイスなどの文学作品に見出している。Bubbは、キップリングやエドワード・カンドラーの作品に姿をあらわす「時代錯誤的」な対象を、帝国主義の“official myth” (612) としての進歩や近代性に対する作家たちの懐疑的態度をあらわすものとして読み込んでおり、見落としがちな細部に意味を見出す精読の実践としても興味深い。

さて、要約だけでもお腹いっぱいになったかもしれないが、このような豊穡きわまる時代記述の森林のなかにみずからの「けもの道」をつけてゆく責務は、読者それぞれに任されている。その手がかりとしては、特定の作家名かもしれないし、ジャンル名かもしれないし、あるいはこの書評の筆者であれば、やはり「モダニズムの系譜」であるかもしれない。ただし、第七章のWhitworthがRaymond WilliamsやFredric Jamesonに訴えつつ論じるように、すべてを(拡張した)モダニズムに包摂してしまうよりも、資本主義的近代の不均衡発展が絶えず生み出し続けるその外部の時間・場所をつねに想定しつつ、モダニズムがなにを継承したのか、なにを取りこぼしたのかを考えた方がより生産的かもしれない。そのような関心からすると、一義的に解釈できない「新しさ」の種類の複数性を論じた第二部、政治・社会・経済言説を論じた第六部の諸論考がともにユートピア思想に言及していることがやはり筆者には興味深かった。FernihoughやLiveseyが論じる新たな自我や倫理を追求するユートピア主義と、例えばKohlmannの論じる当時の具体的な社会・経済的制度改革としての(ウェルズ的)ユートピア主義は、創造的な葛藤をはらんで同一の時代に共存していたのではないか? そのようなユートピア思想の内的葛藤は、たとえば“anti-novel” (441) として読み解かれるモリスの『ユートピアだより』

(1890)を経由すれば、この時代におけるリアリズムとモダニズムの葛藤にどのように関連づけられるだろうか？ 対話に参加してあらたな疑問を持ち帰ることが学会参加の最良の「お土産」だとすれば、この論集は参加者たちにじゅうぶんすぎるほどのお土産を手渡してくれる、ずいぶん気前の良いイベントだったと言えそうだ。

——青山学院大学准教授